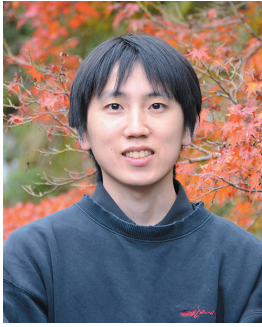


さつま × しごと

Vol.09



もりおか しょう
盛岡 翔 さん (29)

奈良県出身。中学生のときに見たテレビ番組をきっかけにガラスの魅力に目覚める。大阪芸術大学を卒業後、薩摩びーどろ工芸に切子師として入社。現在は、職場で出会った広島県出身の妻と12月で1歳になる長男の3人で永野地区に居住。

切子師 × 盛岡翔



▼「好きなことを仕事にしる」。永野地区にある薩摩びーどろ工芸株式会社で働く盛岡翔さんが、小さい頃から父親に言われていた言葉です。盛岡さんは奈良県出身で7年前に本町に移住。ガラスに繊細なカットを施し、複雑な文様を生み出す切子師として日々技術を磨いています。

▼芸術に囲まれた少年時代を過ごしていた盛岡さん。父親は文芸、母親はインテリアを学生時代に学んでいたそうです。「子どもの頃からものづくりに携わる仕事がしたいと思っていました。中学生のときにガラス工芸の腕を競うテレビを見たことが、この世界に興味を持つきっかけです」と話します。高校は美術科、大学は両親と同じく大阪芸術大学で、工芸学科ガラス工芸コースに進学。「大学とは別に切子の教室に通い、そこでガラスを削る楽しさに気がきました。切子にどんどんはまってきましたね」と笑顔を見せます。

▼入社後は、吹き上がったガラスの口や底を平らにする作業を約2年、削り終わったガラスを磨く仕上げ作業を約3年経験した後、ガラスを削って文様を出す工程を任せられるようになりました。「カットを担当するようになって1年ちよつと。藍色などの暗い色、特に黒切子はガイドとなる割付線が全く見えず、ベテラン

ガラスを削るカッターは大きさや材質もさまざま。工程や文様によって使い分けます。



限定品の黒切子「弦」。複雑で繊細なカットが同社の技術の高さを物語ります。

の切子師だけがカットします」と難しさを話します。「薩摩切子はもともと殿様への献上品でした。厚みがあり色が被せてあるため深いカットになり、特徴的な濃淡が生まれます。吹き師と切子師が一つ一つ手作業で作るため、同じものが一つとしてありません」と熱を入れます。

▼「自分の名前を求めて買いに来てくれるのが理想です」と話す盛岡さん。「辛いことがあっても、切子に向かっているときは忘れさせてくれます」と続けます。「好きなことを仕事」にした盛岡さんは、切子師としての長い道のりを一歩ずつ確実に歩み続けています。